



小田実全集（評論 第10巻）

「共生」への原理



講談社
小田実全集
Makoto Oda

目次

I	おびただしい死、おびただしい生	7
II	どんづまりからの認識	99
III	「アウシュビッツ」と「デイル・ヤシン」	137
IV	「存在のことば」、「運動のことば」	165
V	「訴える人」と「道行く人」	215
VI	「タガンタガン」の繁茂のなかで	253
	あとがき	301

「共生」への原理

I
おびただしい死、おびただしい生

「玉碎」ということばがあります。長年気にかかって来たことばです。もちろん、気にかかっているのはことばとともにことばがさし示すことがらですが、あまり気にかかるので、機会をつくつて、せめてものことに「玉碎」の現場の島に出かけることにしました。そこに何かが残っているというわけではありません。よしんばそこに「玉碎」の日本軍の兵士の遺骨のかけらが残されていたとしても、遺族ならぬ身、もつて帰つてどうしようということもないでしょう。ただ、そこで立ちどまつて考えてみたかった。それだけのことです。

行先の選定には政治がからんでいます。というより、私自身のせいだと言つたほうがよいかも知れませんが、たとえば、アッツ島、これはまぎれもなく「玉碎」の島ですが、あいにくなことにアメリカ合州国の領土で、アメリカ合州国というところは私に対してなかなか入国の査証をくれない国です。ベトナム戦争反対運動でさんざんよからぬことをしたからというのでしょうか。カーターさんの政権になつてからは事情は変つたかも知れませんが、ニクソンさんのときはおろか、すでにベトナム戦争がすんだフォードさんのときでも、いろんな術策をろうしてやつとこささまざまな制限つきの査証をくれる始末でした。

先方様には先方様の都合があるのでべつに文句を言っているわけでもないし、それほどアメリカ合州国に行きたいと考えているのでもないののでたいして実害はないのですが、ただ、アッツ島にはこれ

で行けないことになった。サイパン島も、今はアメリカ合州国の信託統治領とかいうものになつていたので、行けないことになりました。もちろん、またもやいろんな術策をろうすれば査証をくれないこともないでしょうが、「玉碎」の島に行くのにそういうことはしたくない気持もたぶんにあります。こういうのは感傷と言うよりほかにない気持の動きでしょうが、人間、感傷なしには生きて行けないし、感傷が考えさせることもあるものです。

それで、タラワ島に行くことにしました。地図をひろげていただければ判るのですが、太平洋のどまんなか、赤道の少し上あたりにギルバート諸島という小さな島のひとつらなりがあります。来(七八)年には独立して小さな共和国をかたちづくるらしいのですが、そのひとつらなりの島のひとつがタラワ島です。北方にもうひとつ、マキン島があつて、この二つ、「マキン、タラワの玉碎」というと、私ぐらいの年輩の人間なら、たいていの人がおぼえている共通の記憶のようなものにちがいありません。そこまで行くためには、先年独立した、これもまたちつぽけな独立共和国のナウル島を通過して行くのですが、ナウル共和国へ行つて来ると友人や知人に宣言するようにして言うと、みんな、いちように、そんな国どこにあるんですかとことばを返します。ところが、タラワ島というと、あ、「マキン、タラワの玉碎」か、というぐあいに対応する人が私ぐらいの年輩の人間には多かつたのは、それだけそのときの記憶が心にふかく刻み込まれているからでしょう。これは余談ですが、ナウルを知らなくて、「マキン、タラワの玉碎」のことを言い出した人のなかには在日朝鮮人、韓国人の友人がそれぞれひとりあていました。

ギルバート諸島は来(七八)年独立しますが、目下のところはイギリスの領土です。それで査証は

難なく手に入ります。そういうわけでそこに行くことにしたのですが、もうひとつ、理由があつて、やはり、それは「マキン、タラワの玉砕」の衝撃が大きかつたからです。アッツ島の「玉砕」のほうが先で、そのときも衝撃を受けたのですが、「マキン、タラワの玉砕」のほうが今考えてみてさらに衝撃が強かつたような気がするの、アッツ島のときはそれはまだ例外としてその事実を受けとめることができたからではないかと思ひます。「マキン、タラワの玉砕」となると、そうはいかない。何か底知れぬほど不吉なことが本格的に始まつたという感じでした。その不吉なことは中部太平洋というはるか遠いところで始まりながら、着実に北上してついに私のところにも達する。そこまで私を感じとつていたかどうかは疑問ですが、そういう感覚のトバ口のところには私にいたことは事実だと思ひます。そして、それは私ひとりだけのことではなかつたにちがいない。すでに、ガダルカナル島での戦闘が完全な敗けいくさであつたことは子供の私にもはつきりと判つていたことでした。

「マキン、タラワの玉砕」があつて一月近く経つて、大本営ははじめてその事実の発表をしますが、一月近く発表をおくらせたのも、そういう日本国民の不安な気持をおもんばかつてのことではないかと思ひます。「日本国民」といういささか大げさなことを使つたので、ここで少しつけ加えておきたいのですが、その大げさで大時代なことばをここでは私はまだ使つておきたいと思ひます。そのころは、人びとの気持がまだ「日本国民」というかたちで言いあらわしていい、いや、そうすべきものであつたからです。私自身のことを考えてみてもそんな感じがしますが、そうした「日本国民」感覚であるいは、そのころのお題的なことばで言えば、「日本少国民」感覚は沖繩失陥くらいまでのことであつたような気がします。このところは私のように大阪という大都会にあつていろんなものの崩

壊をまのあたりに見た人間とそうでなかった人間とが微妙にちがって来ることなのですが、一九四五年八月十五日、いくさの終りを告げる報知を私はどうにも「日本国民」としてきいたような気はしないのです。ひとりの人間としてきいたというような当世風の口はばつたことを言うつもりはないし、たしかにそんな感じではなかったのですが、さりとて、「日本国民」としてきいたのではない。その証拠にナミダひと筋流れなかった。「日本国民」として天皇陛下に申しわけなく思ったわけでないし、ガシンシヨウタン、この仇は必ず討つべしと心にちかかったわけでもない。私はただ終つたなと思っていました。それでどうしようというのでもない。ただ、終つたというわけです。タダの人になつたのではないかと思えます。もちろん日本が敗けたという意識はあつたのですから、たかだか、「日本人」——タダの「日本人」になつていたにちがいない。今私たちのたいていは「日本国民」として何をするというような気持はもつていないでしょうが、「日本人」という気持はもつているでしょう。そういうことのありようは日本の外に出たときによく眼に見えて来るものですが、海外で出会う日本人は、商社員もジャルパックさんも、はたまた、すでにいささか時代おくれになりましたがヒッピー諸公も、その言動は「日本国民」というものではありませんが「日本人」という感じはして来ます。その感じが、ときには、あ、これは昔なら「日本国民」が出て来たんやな、と思つたりするときもあり、そうでないときもあつたりします。自分の場合を見ていてもそうです。

だいぶ脱線してしまいましたが、さつき言いかけた通り、「マキン、タラワの玉砕」の大本営発表は当の「玉砕」の一月近いあと、昭和十八年（ここでも、そのときの私という「日本国民」の意識にそくして「昭和」という年号を使つておくことにします）十二月二十日に行なわれました。

次のようなものです。

大本營発表（昭和十八年十二月二十日十五時十五分）

「タラワ」島及「マキン」島守備の帝国海軍陸戦隊は、十一月二十一日以来三千の寡兵を以て五万余の敵上陸軍を邀撃熾烈執拗なる敵機の銃爆撃及艦砲射撃に抗し、連日奮戦、我に数倍する大損害を与えつつ敵の有力なる機動艦隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の寄与をなし、十一月二十五日最後の突撃を敢行、全員玉碎せり。

指揮官は海軍少将柴崎恵次なり。

尚両島に於て守備部隊に終始協力奮戦せし軍属約一千五百名も亦全員玉碎せり。

簡単なものです。簡単なものだと思います。こういう発表の文章をいくら見ている、守備隊三千名、軍属約千五百名、あわせて、四千五百人の人びとがどのように死んだかはさっぱり判らないし、けになっていきます。あるいは、この軍属約千五百名のなかには朝鮮人も入っていた。彼らが何人いたか、そのあたりはこの発表を見てもうかがい知れないし、この発表の文章をのせていた防衛庁防衛研修所戦史室著の「中部太平洋方面海軍作戦(2)昭和十七年六月以降」のどのページを見てもまるつきり判らないことになっています。ただ、そこにつけたしのようにして書いてあった「玉碎」の生存者——つまり、生きのびてアメリカ合州国の捕虜になった人たちですが、そのなかに朝鮮人がいることで判ります（生存者はマキン島で日本人一人、朝鮮人百四人、タラワ島ではその数は日本人十四人、朝鮮人百三十二人になっています。もちろん、この数字はアメリカ合州国軍側の発表によるものです）。タラワ島の現地で出会った、彼らといっしょに飛行場設営のために働いた、いや、働かされた住民たち

も、設営隊の軍属のなかには四種類の日本人がいたと言っていました。日本人、朝鮮人、「オキナワ」人、それにもう一種類、「トウキョウ」という人たちがいて、この「トウキョウ」人が何を意味するのか判りませんが、発電機の整備をしたりするような技術関係の人だと言っていました。この四種類のなかでいちばん重労働をさせられていたのは「オキナワ」人で、海岸から石を運んだり、ヤシの木を伐つたりするのは、たいてい、「オキナワ」人だったと彼らは言うのです。

いっしょに働かされた現地のギルバート人たちのことはあとで述べることにして、現地の人たちがそうした四種類の日本人を識別したのは、隊がたぶん四つあって、みんながべつべつに働いていたからですが、気にかかるのは、そういうことの内わけがさっぱり「戦史」というようなものには出て来ないことです。たとえば、さつきも言いましたが、朝鮮人は、いったい、何人いたのか。いや、帝国陸海軍というところ、軍人以外の軍属のことなど、それが純粋日本人であろうと「トウキョウ」であろうと、そんなものはタダ働きの労働力以外の何ものでもないと考えていたらしくて、「戦史」には軍人の数のほうはおおむね（と言つても、「推定される」という註釈が入っています。軍人でもトッパは、もちろん、「推定される」ほうに入っている）キチンとした数字が出ているのに、軍属の数のほうはマキン、タラワ両島ともあくまで「約一〇名」です。大本営発表ではこの「約」は両島あわせて「千五百名」ということになっていますが、「戦史」の書き手の防衛庁防衛研究所戦史室の人たちが「推定した「守備兵力」の表のなかの数字から私も「推定」してみるとどうしてもっと多くの数になります。「戦史」の同じところののせてあった「米軍資料」では、そこははつきりとしていて、マキン島での軍属の死者は四百十四人、タラワ島ではそれが二千二百十七人の多数にのぼっています。両島あ

わせると、二千六百三十一人の飛行場建設隊員が守備隊員といっしょに死んだことになります。つまり、約千人ほどが「大本営発表」より余分に死んだわけです。大本営発表では「三千の寡兵」ということになっている守備隊員の数は「米軍資料」ではマキン島で三百八十四人、タラワ島で二千六百十九人、両島あわせて三千三人で、こちらのほうは「大本営発表」もきわめて正確です。

「米軍資料」の数字は、もちろん、マキン、タラワ両島ともに全島にあまねくひろがってころがっていた死体を数え上げてでき上った数字であるわけですが、これはベトナム戦争でおなじみになった「ボディ・カウント」というアメリカ合州国軍お得意の奇怪な行為のはしりとなったものであるかも知れません。マキン島のごとは知りませんが、タラワ島のごとは飛行場建設に駆り出された二人のギルバート人キアキア・タラウさんとサム・ハイランドさんに話をきいたのでたしかなこととして言えるのですが、たたかい終ったあと、とにかく現地は「ノウ・ハウス、ノウ・トリー」で、はしからはしまでずっと見通せたそうです。そして、「ボディ・オール・オーバー・ジ・アイランド」——つまり、島は見わたすかぎり、死体。死体のおいが忘れられないと二人は言っていました。

死体は日本側、アメリカ合州国側ともにあって、どちらにもおいを強烈に放っていたわけですが、日本側の死体はそのままかき集めてあちこちに埋めたそうです。そして、その死体処理はギルバート人がやった——いや、ここでもやらされたということばが適切でしょう、やらされたのはギルバート人です。地面に穴を掘ると今でもいくらかでも骨が出て来ると言っていました。たいして過去のことではないのですが、タラウさんが新しい家を建てるために地面に穴をあけると、ほとんど完全なかたちでガイコツが出現したということです。これは彼らの話ではなくホンコンからやって来てそこに住み

ついている中国人のフンさんの話ですが、彼はわずか数年ほど前に島に電話線を敷く仕事をした。そのときにはずいぶんそういうものにお目にかかったそうです。対岸の島から電線を海底ケーブルで引いて来たときに砂浜近くの海のなかでひっかかるものがあつた。しらべてみたらそれは日本軍の戦車で、砲塔を開いてみたら、日本兵の死体があつた。戦車を動かしていたときそのままのかつこうで骨になつていたそうです。

さつきの二人の話にもどれば、ハイランドさんが「人が映画で見ることを自分たちは自分の眼で見たのだ」とまつたく適切なことを言っていました。映画とちがつてにおいがした。そうも言っていますが、それは私が空襲のときに体験したのと同じことなので、私は自分でも意識しないままで自然にうなずいていました。

一一

マキン島までは足をのばすことができませんでしたので、タラワ島のことだけに話をしほりたいと思います。さつきからタラワ島、タラワ島と言って来ましたが、ほんとうのところはタラワ島というのはそのあたりのサンゴ礁の諸島の総称で、たたかいのあつたのはそのひとつのベシオという名前の小さな島です。島というよりはサンゴ礁と言ったほうがよいもので（アメリカ合州国側は「島」ということばを使つていません。このあたり、すべて、「礁」ということばで呼んでいます。「ベシオ礁」というぐあい입니다）、長さが三キロはありましようか、幅はいちばんふところ七百米メートルぐらいの、細長い、そして何より小さい島です。車でまわれば、まず十分とかかりません。フンさん

の「トヨタ」の車でまわりました。フンさんとはベシオ島までの小さなフェリーのなかで知り合いました。何しに来たかというので、「玉砕」のあとを見に来たというところでは自分の車でまわってやろうということになった。二日間、彼は車の運転手をやってくれました。ギルバート人は親切で、見知らぬ人間にいくらでも助けの手をさしのべてくれるのですが、そういう親切は島に住む外国人にまでうつっているのにちがいません。

どうしてそんな小さな島で、日米あわせると六千人ほどの死者を出すほどのたたかいが行なわれたのかというと、日本海軍が飛行場をつくっていたからです。そして、どうしてそんなところに日本海軍が基地をつくったのかというと、ガダルカナル島で敗けいくさが始まって、ぜひとも、そこらあたりに基地をつくって制空権をにぎらなければならぬと海軍のえらいさんたちが考えたからです。そこへもって来て、昭和十六年の開戦以来、そのあたりでただひとつ、日本海軍が小さな見張り所をもうけて小人数の兵力を常駐させていたマキン島が、潜水艦を使つてのアメリカ合州国海軍の海兵隊の奇襲攻撃を受けて、「全員玉砕」するという事件がありました（マキン島の「全員玉砕」はしたがって二度あつたわけです。二度目ののは、もちろん、はるかに大規模です）。そのあと、そのころはまだ日本海軍は力をもつていてすぐ奪い返したのですが、そういう事件もそのあたりで制空権をとらなければならぬという考え方にえらいさんたちを駆り立てたのでしよう、昭和十七年九月三日に陸戦隊によるタラワ島攻略作戦が行なわれました。「無血上陸」であつたと「戦史」は言っています。ただ、たしかに日本海軍に関するかぎり「無血」であつたでしょうが、ベシオ島のまんなかの墓地にはかなり大きな十字架が立っていて、はじめフンさんは、あれも日本人に関係のあるものかも知れないと言っ

てそこまで連れて行ってくれたのですが、十字架の下の墓碑銘をよくよんでみると、関係があるとしても、フンさんと私が予期したのとはまったく逆のものでした。日本海軍によって殺された二十二人のイギリス人たちの墓だったのです。念のために言っておきますが、ギルバート諸島はそのころも今もイギリスの植民地で、来年ようやく独立することはさきに書きました。

二十二人はベシオ島ばかりでなくギルバート諸島のあちこちでつかまつた人たちですが、この島にひとまとめにされてから、墓碑銘によれば、一九四二年（昭和十七年）十二月一日に殺されたのだそうです。銃殺されたということです。彼らは「身二寸鉄帯ビズシテ彼ラノ職務ヲ護持シタ」と書いてあったので民間人だったらしいのですが、もちろん、「戦史」にそのあたりのことが書いてあるわけはない。二十二人の名前が彫り入れてありました。それをみんなして見ているうちに、ベシオ島への案内役を買ってくれていた今はナウル島で学校の先生をしているギルバート人のテポイタブ・ナタノさんが大声をあげました。二十二人のなかのM・A・サードさんという方が彼が昔学校で教わった先生だったということです。いい人だったと言っていました。若い人でしたが、事業もしていて、かなりの金持だったことなので、ひと旗あげに本国からこの中部太平洋の植民地まではるばるとやって来た人物だったでしょう。はるばるとやって来たところで、ひと旗あげるまえにいくさになってしまった。このあたりのイギリス人はみんなフィジー島に逃げるように命令されていたのですが、その命令を拒んだところを見ると、なかなかの人物だったのかも知れませんが、あつけなく殺されてしまった。日本側は「無血」だと言っているのです、まるで殺されなかつたみたいな殺され方です。私がナタノさんに話をきいたり、十字架の写真をとったりすると、彼自身とフンさんが、こんなことを

日本で書いたり、とった写真を出したりすると、日本でおまえの評判がわるくなるのではないか、日本人は怒り出すのではないかと真顔で心配し始めました。「非国民」になりはしないかというわけです。

この「無血上陸」のことを、ハイランドさんやタラウさんたちは、「日本人は何の通知もなしに勝手にやって来て、国旗をかかげた」とうまいこと言っていました。そのまえにはM・A・サードさんの祖国のイギリスが国旗「ユニオン・ジャック」をかかげていたわけですが、そちらのほうのかかげ方もまさしく「何の通知もなしに勝手にやって来て、国旗をかかげた」というものでした。タラウ島では今、なんとか先祖の文化遺産をまもりたいという考えをもつ人たちが集まって「トウンガバル協会」（「トウンガ」はギルバート諸島、「バル」はエリス諸島のことです。どちらも昔からの呼び名です。ついこのあいだまで、イギリスはギルバート、エリスをひとまとめにしてそのあたりの植民地行政をしていましたが、エリス諸島は今では「トウバル」という名前です。べつの地域になっています。来年、ギルバートとともに独立するはずですよ」という集まりをつくっています（ギルバート諸島にはまだ博物館はありません。なんとかしてつくりたいものだ、協会のキモ煎りが言っていました）、協会はじめてのトウシャ版刷りの出版が、女王様（ビクトリア女王です、そのころは）の命令を受けて「ユニオン・ジャック」を立てにギルバート諸島にやって来た大英帝国軍艦「ロイヤリスト」号のデイビス艦長の航海日誌でした。デイビス艦長は一八九二年五月二十七日に、タラウ島の南のアペママ島で、王様と三、四百人ほどの住民を集めて、「女王様の艦隊の一員にして、西太平洋地域においては女王様の軍艦『ロイヤリスト』を指揮する艦長及び副司令長官エドワード・ヘンリー・メグス・デイビス」は、今日ここにおいて、ギルバート諸島が大英帝国の保護下におかれたことをおまえた

住民のままで宣言すると用意した文書をよみ上げると、そのまますぐ「ユニオン・ジャック」をかか
げた。まったく手まえ勝手な一方的な行為であきれるほかはないのですが、一方的と言えば、そのま
えにイギリスはドイツと協定を結んで、中、南部太平洋のそれぞれのとり分を勝手にきめています。
ナウル島やマーシャル群島がドイツのものなら、ギルバート諸島やエリス諸島は女王様の大英帝国の
ものというぐあいにはきめていて、この勝手気ままさにはあきれるほかはないのですが、しかし、面白
がつてばかりいるわけにはいかない、日本だって、それこそ勝手にやって来たのですから。そのあと、
アメリカ合州国も勝手にやって来た。

タラウさんがまたうまいことを言っていました。タラウさんは、自分の名前に似た日本人の名前が
あるだろうと言い、「太郎」だろうと言うと面白そうにうなずいて白い歯を出して笑う、ベシオ島の
協同組合長をしている温厚な紳士ですが、とにかく、あなた、でっかい国がやって来るんだ、ことわ
りようがないよ、どうにもしようがない——その「しようがない」は彼の英語では「ノウ・チョイス」
(選択の余地なし)でしたが、それはたしかに実感のこもった声でした。「ワン・ビッグ・パワフル・
カントリー・カムス・エンド・ゼン・アナザー・カムス」とも言っていました。ひとつ来たと思ったら、
また、ほかのがやって来た、とでもいうのでしょうか。これもまた、実感がこもっていました。こう
いうことばに横手で大きくうなずくのはホンコン出身のフンさんです。フンさんはまだ若くていくさ
のときはホンコンで赤ん坊だったにちがいないのですが、それでも彼は中国人です、いろんなことを
きいたりしているにちがいない、日本人が大量に殺されたのはここばかりではない、日本本土でだつ
て空襲でたくさん死んで悲惨だったと何気なく言うと、「バット・ユー・キルト・メニー」と即座に

さえぎっていました。おまえさんのほうもたくさん殺したじゃないか、という感じですよ。「ジャパニーズ・キルト・メニー・メニー」とも言っていました。「キルト・エブリフェア」とも言っていた。あちこちで、めちやめちやに殺したというのでしょうか。フンさんも、しかし、ベシオ島の日本兵たちは中国での日本兵とちがつて悪いことをしなかったと言っていました。それはハイランドさん、タラウさんの意見でもあります。

悪いことをしなかったと言つても、人殺しや強姦や泥棒をしなかっただけのこと、彼らが決して天使のようにふるまつたということではありません。天使ならはじめから他人の土地に入り込むことはなかったでしょうが、まず、ベシオ島の全住民ことごとくが島から追い出されました。飛行場の建設、全島の基地化の邪魔になるというわけでしょう。もちろん、追い出したからと言つて立ち退き料を払つたわけでもなければ、べつのところ家を建ててやつたわけでもない。ただ「単純に」^{シンプリ}（というのも二人のギルバート人の表現です）追い出しただけのことです。彼らは仕方なしに今日ではフリーで三十分ほどの距離のタラワ本島のほうに親類縁者をたよつて移り住んだ。家もあたらしく自分で建てねばならなかったということでした。もつとも、彼らの場合、家を建てると言つても、ヤシの木を伐つて来て骨組みをくみたてれば、あとは屋根はパンダナスの葉っぱでふき、壁はヤシの葉っぱでつくるという作業なので、自分でやるわけです。パンダナス（の実は強いて言えばバナナに似た味で、食べます。いや、食べるといよりはチューインガムのように口のなかでモグモグやつて汁けをすいとるのです）の葉っぱのほうが長持ちして一度それで屋根をふけば四、五年は持つそうですが、ヤシの木ほどあちこちにあるわけではない。それでヤシの葉っぱで屋根をふくときもあるそうですが、そ

れですと、一、二年でふきかえしなればならないと、日本軍に移住を強制されたギルバート二人がごもごもついでに教えてくれました。

彼らの新しい家の屋根がパンダナスの葉っぱなのかヤシの葉っぱなのか、そのところは聞きもらしましたが、とにかく移住はそれで完了した。お次は使役です。ギルバート人の側から言えば、「無償^{！レイバ}労働」の提供です。ここでも、もちろん、「ノウ・チョイス」でありました。ただ、この地の日本軍のやり方がうまかったのは、直接彼らが人びとを使役に駆り出したのではなく、村のかしら[、]みたいな存在を通してやったことです。かしら[、]には、それがハイランドさんにもタラウさんにもたいへんに印象的なことだったのでしょうか、くり返して言っていました。腕章をつけさせて（「あれ、何だっけ、あのホウタイのようなものは」と言っていました）、その腕章をつけたのが各村にわりあてられた人数（一日に十人から十五人だったようです）を送り出した。それでややこしい問題がたいて起らなかったらしいのですが、十五歳といえどもこの地では立派な労働力です、その年ごろだったハイランドさんもタラウさんもベシオ島の飛行場建設現場に連れて行かれたということです。そこにはお粗末な宿舎があつて、交代が来るまで何週間かそこにいて働く。いつときに四百人が日本人——四種類の日本人といつしよに働いていたということでした。労働のお返しは食いものでした。まず、おにぎり。そこに入っていた赤いもの（ウメ干しでしょう）。ほかに、タコ、ヤシ（これはお二人とも日本語で言っていました）。金をくれとは言わなかつたのかと訊くと、言えばこれだよと、ハイランドさんが銃剣をつきつける真似をしました。

アメリカ合州国側も彼らを死体のあとかたづけに使つたことは公平を期して言っておきましょう。

ただし、それは強制ではなかった——しかし、それにはもうひとつ、ただしがついていて、とにかく、連中のところへ行けば何でもあつたからな、です。チョコレート、チューイングム、コココーラ——それで、みんな、働きの行ったそうです。ここでも「ノウ・チョイス」であつたわけです。ハイランドさんが結論づけて言っていました。「日本人はわしらを働かせたよ、アメリカ（合州国）人は働かせはしなかつた。しかし、あいつらはチョコレートを持っていた。」おかげで、この「権力の交替」（もハイランドさんのことばです）はうまく行なわれたそうです。ただし、もちろん、住民とは何の相談もなしに、です。もとの支配者だつた二、三人のイギリス人まで上陸部隊といつしよにやつて来てアメリカ合州国の海兵隊が「星条旗」をかかげるとすかさず横に「ユニオン・ジャック」をかかげたので、これにはさすがに海兵隊員の連中も怒つたということでした。「みんな旗が好きですね、何故でしょう」とタラウさん、温厚な協同組合長さんが言っていました。ほんとうに、何故でしょうか。

お二人ともなかなか意識の高い人と見受けられました。ハイランドさんはお祖父さんかヒイお祖父さんか誰かがイギリス人でそれでそんなイギリス人くさい名前になつていますが、見たところ、肌色は浅ぐろく、髪もまっくろで純血の、タラウさんと変りはありません。ペシオ島で手広く事業をやつていて、ちつぽけなバスも走らせれば、小さなビヤホール（と言つても、野外の「ビールのみ場」という感じのものです）ももつている、パンも彼のところで作つていてという、ことばのもつとも語源的な意味において「実業家」と言うべき人物でしょうか、私が、とにかく戦争はすんだ、全世界にふたたび戦争が起ることがあつてもここが戦場になることはないだろうというようなアホらしいことを暑さばけのせいで口にする、彼はすかさず大きくうなずき、ひとつ、きみの意見をききたいんだ

が、と切り出してきました。何を言い出すのかと思つたら、ギルバートは独立後、軍隊をもつことにきめたというのです。このあたり、すでに独立して十年近くになるナウルは軍隊をまるつきりもつていない。それなのにここではどうしてか、というわけです。「セルフ・デフェンス・フォース」と英語で言っていましたから、まさしく「自衛隊」です。たつた百七十人の軍隊ですが、それでもすでに数百万ドルその設立のために使つたというし、一年に二十五万ドル（すべて、オーストラリア・ドルです。このあたり、すでに独立国となつたナウルもそうですが、いまだにオーストラリア・ドルを通貨として使っています。それだけオーストラリアの経済力のこのあたりでの強さがうかがわれるというものですが、外国通貨を使っているおかげで収支がどうなっているのかはつきりしないと、ギルバート政府の通産大臣が言っていました。独立まえとはいえ、すでにかんがりの自治が認められていて、議会もあれば、内閣もあつて、「筆頭大臣」^{チーフ・ミニスター}という名の総理大臣もいます。通産大臣はまだ三十歳そこそこの若さで、このあいだまでは中学校の先生をしていました）の維持費がかかる。バカバカしいかぎりだとハイランドさんはさかんに憤ガイしていましたが、この憤ガイは私の自衛隊嫌いにも一脈あい通じるものがあつてよく判る憤ガイです。いったい、何をまもるつもりかねとも言うていました。これも私がわが祖国の自衛隊について政府のえらいさんたちに訊いてみたいことがらなのですが、私がそうしたことを口に出すまえに、ハイランドさんが、きみは「筆頭大臣」に会うそうだが、会つたら、やつに訊いてみてくれと私の気持を先どりするように言った。ヤシの木でもまもるつもりだろうか、それとも、やつが大統領になつたときに捧げ銃をもらうためか、と彼はなかなか皮肉屋です。この話には後日談があつて、実際、私は「筆頭大臣」に会つたときに、そのことを訊いてみま

した。まさか、捧げ銃ウンヌンは口にしませんでしたが、何のためかという質問に、チヨビヒゲを生やした今年三十九歳の「筆頭大臣」エンナブア・ラシエタさんは国内治安のためだと即座に答えました。「筆頭大臣」の役所と言ってもブリキばりの、日本で言うなら工事現場の飯場めいたものですが、ゾウリばきで出て来て、はじめ五分のはずがかれこれ一時間近くしゃべった。そんな気さくな内閣の気さくな「筆頭大臣」ですが（独立後は、たぶん、彼が大統領になるのではないかと思えます）、国内治安のためだというのはいささかつかずすぎる答なので、少し皮肉を言ってみる気になりました。「革命でも起りますかね」私がそう言うと、彼はユカイそうにハツハツと笑いました。

ハイランドさんの軍隊に対するアレルギーには、やはり、戦争ちゅうの体験が投影しているかも知れません。さつきも言いましたが、ハイランドさんのからだのうちにはイギリス人の血が入っています。彼のお父さんとなるとさらにイギリス人に近くなるのは当然のことで、日本軍がお父さんをうたがってかかったとしてもふしぎはない。それで、ある日、突然、彼の家は剣つき鉄砲をもった百五十人ほどの日本兵に急襲されることになる。家宅搜索を受けたのですが、万が一、何かそれらしいものが出て来たら、もうそこでお父さんの生命はなかったにちがいない。さいわい、ハイランドさんはそのころは日本語がよくできた上に、やって来た日本兵のなかで「ナンバー・トゥー」の人間を知っていた。「マエタ」という名前の人だったそうです。勇敢で（アメリカ合州国軍が上陸して来たら、オレは死ぬまえに必ずアメリカ兵を殺すと言っていた）、その上、正直で、日本軍の旗色がよくないことをかくさなかった。その他いろんな点で立派な人だったということです。彼がいたおかげで、ハイランドさんの日本語の力とあいまって、家宅搜索はおびなりなものになってお父さんの生命は助かつ

たそうです。お父さんはもととスパイでも何でもありませんでしたが、うたがわれたらほんとうにどういうことになっていたか判らなかつた。そういう住民のあいだでの「地下活動」の有無について訊いてみましたが、ハイランドさんの答は「ナイ」という日本語の断乎とした答でした。

ベシオ島でのたたかいが終つてからすぐ、彼のお父さんは「ノウ・ハウス、ノウ・トリ、ボディー・オール・オーバー・ジ・アイランド」の現場に飛んで行きました。彼の生命の救い主の死体を見つげるためですが、ついに判らなかつたということですが、しかし、勇敢な「マエタ」のことだ、必ずや、殺されるまえに相手を殺したにちがいないとハイランドさんは言います。そういう立派な人物がいたおかげで、日本軍はわるいことをしなかつたにちがいない。彼がそう言うので私がうなずくと、彼は少しきびしい顔になって、しかし、オーシャン島では島民を殺したとつけ加えました。オーシャン島はギルバート諸島の西の外れにある孤島で、リン鉱石が出ます。ナウルが、一説によるとアホウ島のウンコの堆積だという地下資源にたよりきりになっている国だということは世にあまねく知られた話ですが、ナウルほどではないにしても、ギルバート諸島の経済もかなり気まぐれアホウ島のおかげをこうむっていることも事実です。国の収入の半分がオーシャン島のリン鉱石だとチョビヒゲの「筆頭大臣」さんが言っていました。あと二、三年でなくなるそうです。それにとつて代る収入を見つけ出せるかどうか、独立ギルバートの未来をきめます。ナウルのリン鉱石のほうもあと二、三十年のいのちですが、島民はあんまり気にとめていないように見えます。政府はそれでもかなり心配しているものと見えて、オーストラリアなんかに貸しビルの摩天楼めいた高いのをたてたり（切手の図柄になつていきます。はじめ切手を買つて、何でこんなへんてつもない、しかも、この島にないビルが図柄

になつてゐるのかと思つたら、そのナウルの未来をになう貸しビルでした)、不動産投資をしたりしてありますが(田島を宅地に売つてひと財産ころがり込んで来た農家のことを考えてみられるとよろしい)、将来への不安はなかなか消えないようです。しかし、私と話していたナウル政府のイギリス人のえらいさん(政府の大、中、小さまぎまのやとい人のなかには、かなり白人がめだちます。みんな、やとわれて来ているのです。こういう人たちがいなくならないかぎり、まだまだ独立国とは言えないにちがいありません)は、キミはそんなことを言うが、二十年先、三十年先のイギリスや日本がどうなつてゐるか言えるかねとまことにもつともなことを言い、私もたしかにそうだと思ひました。他人のことはかるがるしく言えないものです。

二二

ベシオ島のたたかいはアメリカ合州国軍にとつても死活のたたかいでした。ここでベシオ島の基地を奪えば中部太平洋全域ににらみをきかすことができ、そこから一気にトラック、グアムを抜けて日本本土に迫つて行くことができる——これが彼らが考え出した中央進攻計画でしたが、ほかにマツカーサーさんたち、フィリピンの奪還(と言つたつて、ギルバート諸島同様、他人さまの土地ですが)を例の有名な「アイ・シャル・リターン」のヒノキ舞台としようとする人たちが主張したソロモン、ニューギニアからフィリピンにまず何はともあれおもむこうとする南方進攻計画、あるいは、アリューシャンから千島に至る北方進攻計画などがそのころの彼らの作戦計画だつたことは周知の事実です。結局、おしまいには、中央突破と南方からの進攻計画との両者が行なわれたことになりましたが、

ギルバート諸島あたりに殴り込みをかけて、あとは一気に中部太平洋を押しのぼって行こうとする中央進攻計画のほうが、私にはヤンキーの気ガイと気魄がはるかにこもった作戦計画であるように思えてなりません。ベトナム戦争で負けたり、そのころ日本に来ていたアメリカの兵隊さんのたよりなげな姿をあまた見たりして、私たちはアメリカ合州国の軍隊というと、やはり、物質主義に毒された弱い軍隊であるというようなありきたりの考え方をしがちですが、正義はわれにありといったん信じていることができたなら（そのあたり、すぐたやすく信じてしまうことができたのがこれまでのアメリカ合州国の悲劇をかたちづくって来たともつけ加えておきます）、なかなかどうして精神力でも強い国です。私たちの太平洋戦争での負けいくさの印象は戦争の末期にどうしても強くなっているのに、アメリカ合州国の物量に敗けたという感じと考えの双方をもつてしまつて、アメリカ合州国の精神面での強さを軽視してしまいがちなのですが、第一線でたたかつた日本の兵士たちは必ずしもそういう気持はもつていないようです。ことに、ハルゼーさんなどというあばれ者の提督が指揮する機動部隊とじかにわたりあつた日本海軍の人たちは彼らの精神面での強さ、勇敢さ、凶太さを認めるのにやぶさかでないのですが、これは、もちろん、平和な時代においても十分に考えておかなければならないことでしょう。そういう強さがいちばんはじめに太平洋戦争ではつきり示されたのはミッドウエー海戦ですが、こちらにレーダーがなかったとか、運がわるかったとか、いろんな原因はあつたにせよ、数の上からでは圧倒的に優勢だつた日本海軍の機動部隊がはるかに劣勢のアメリカ海軍の機動部隊にポロ負けに敗けたのには（海戦の参加者淵田美津雄さんは奥宮正武さんとの共著の『ミッドウエー』という本のまえがきを「ミッドウエー作戦は惨憺たる敗北であつた」ということばで始めています。つい

でに言いますが、この本はいい本です。のちにあまた出て来た戦記物のたぐいとちがいが、アメリカ合州国がまだ日本を占領していたころに世に出されたこの本は「われわれは何とかしてこれを公刊しておきたかった。理由は簡単であつた。そうしておけば、たとえ天災や地変があつても、どこかに残るであろう。ただそれだけであつた。防衛庁やその戦史室ができそうな徴候は全くなかつたからである」という思いがこもつていて、よんでいて感動します。この点で、ここにもふれられている「防衛庁戦史室」の「戦史」などよりはるかに質の高いものです)、やはり、彼らのしぶとい強さがあつたからではないかと思えます。「わが国が、わが陸海軍が何故に敗れたか」を考えようとする『ミッドウエー』がそこにもふれて書いているのは当然のことですが、ついでにその本から孫引きさせてもらえば、この作戦についてのアメリカ合州国海軍側の公式文書は「ミッドウエー沖の海戦こそは、過去三百五十年間の歴史で日本海軍が初めて喫した決定的敗北であつた」そうです。ここらあたり、オヤと思つたのは、私の歴史感覚のいたらなざでした。朝鮮のことであるんなことをしたり、考えたりしているというのは、ウカツなことに、私は一五九二年に豊臣秀吉の水軍(だって、あれはレッキとした「日本海軍」です。すくなくとも、侵略される朝鮮人の側からはそう見て当然のことでしょう)が李舜臣のひきいる朝鮮海軍にボロ敗けに敗けたことを忘れていたのです。何たることかと思えます。

公式文書はさらにつづけて言います。「ミッドウエー海戦は、長期間にわたる日本の攻勢に終止符を打ち、太平洋における日本海軍勢力との均衡を回復した。」その上での最初の本格的な反攻のはじまりがガダルカナル島への上陸作戦であつたわけですが、さらにそれを激しいかたちで示したのがマキン、タラワ両島への攻撃であつたということができません。逆に言う、それが私たち日本の側にとつ

ては、最初のかけ値なしの陸戦での敗北だったと言ってよいにちがいありません。アッツ島の場合にしろガダルカナル島でのいくさにしろ、寒さとか守備隊が小さすぎたとか、食糧の補給ができなくて「餓島」と化しているとか、これまでの敗けいくさにはいろんな逃げ口上があつた感じですが、この場合にはない。日本軍はたしかに劣勢でしたが、いくさの場合、そんなことを言ってみてもはじまらないし、ガダルカナル島のように飛行場の設営隊しかいなかったところに上陸して来られたわけでもない、十分に準備していたところに海兵隊は上陸して来たのです。タラワ島——と言つてもベシオ島ですが、そこには一万八千六百名、マキン島（これも正確には、ブタリタリ島です）に対しては六千五百名が上陸して来ました。

上陸のまえにまずあつたのは猛烈な空襲です。十月ほどまえから本格的に空襲は始まつたそうですが、もうそのころにはギルバート人たちはベシオ島から本島まで引き潮のときに見えかくれするサンゴ礁をつたつて歩いて逃げていたそうです。アメリカ合州国軍のヒコーキは射たなかつたかと訊いたら射たなかつたと言つていました。それでも空襲でギルバート人は二人死んでいるそうです。コンクリート造りの司令部にいてかえつてやられたということ。アメリカ合州国軍の上陸が近いことは知つていたかと訊くと、二人のギルバート人は、日本人たちは何にも言わなかつたが、けはいで判つたと口ぐちに言つていました。アメリカ合州国軍が勝つと思つたそうです。それは「フリー・トゥ・ウォッチ」できるところに自分たちがいたからだとかハイランドさんは言うのですが、つまり、自分たちはものごとをとらわれないで見たからというのでしょうか。

空襲のあとは艦砲射撃です。その二つでだいたい島の重要な施設と重火器を叩きつぶしておいて、

上陸用舟艇で上陸を始める。これはこのあとアメリカ合州国軍の上陸作戦の常套手段になったことですが、その最初の試みがそこで行なわれたわけです。今、ベシオ島の手あたり次第に日米双方の戦車やら大砲やらの残ガイを海にほうり込んでつくつたという突堤の先にアメリカ合州国海軍がたてた白い記念塔が立っていますが、その根もとにはめ込まれた碑文に、ここでの戦闘の勝利は戦略的に重要であったのみならずそういう上陸作戦の方法が成功した点でも重要であったと書いてありました。

この作戦で、彼らがおさまりの上陸用舟艇のほかに使ったのは、今でも砂浜で残ガイを見ることができませんが、小型の水陸両用戦車です。それがまずやって来て、そのあとを上陸用舟艇がつづく。さらにその背後には軍艦がひかえていて艦砲射撃を加えて来る。ベシオ島の柴崎司令官の第一報も次のように告げて来ています。「敵ハ水陸両用戦車視界内一〇〇隻以上礁内棧橋ノ？北岸一帯二互り接近シツツアリ 其ノ後？ニ上陸舟艇二〇〇隻以上見ユ 敵ハ礁内ニ軍艦又ハ巡洋艦特型三隻駆逐艦又ハ掃海艇四隻以上進入掩護射撃ヲナシツツアリ。」昭和十八年十一月二十一日の早朝のことです。

ただ準備を十分に重ねて来た両軍ともに誤算があつたようです。アメリカ合州国軍側は潮の干満についての誤算があつたようで、引き潮のつもりが満ち潮であつたというのです。それでサンゴ礁の浅瀬に舟艇から飛び込んだあと銃をかかげながら胸まである水のなかを歩かなければならなかつた。そこを日本軍の砲火によって射たれて、一回目の舟艇から降りて来た兵士たちはたいいやられてしまった。上陸に成功したのは、第二回目からの集団だと、ハイランドさんは言っていました。いくさのあとでアメリカ合州国の軍隊に彼らが使役されたことはさぎに書きましたが、そのせいか、彼らはいくさのありようのことをよく知っていました。日本軍の作戦もなかなか巧みで、ほんとうは海岸線

でないところをそう見せかけたりして、大本営発表の言うように、たしかに彼らは「連日奮戦」したのです。ただ、彼らの側の誤算は、アメリカ合衆国の上陸軍が外海のほうから来るものときめてかかって、そちらのほうに砲台をこしらえて、シンガポールのイギリス軍から分捕つてはるばるともつて来た口径二十センチの巨大な大砲をすえついたりしたことです（古い、たしかアームストロング社製の巨砲で、地元の人々は「シンガポール砲」というぐあいには呼んでいました）。島の東のはしの日本軍最後の地になったあたりの二本の大砲（一門は砲身のなかほどからなくなっていました。そこに直撃弾をくらって吹っ飛んでしまったのでしょうか）は外海にむいたまま今でも赤茶けた残ガイを砂浜にさらしています。西端の同じ残ガイは砲身を逆に内海のサンゴ礁のほうにむけています。例の防衛庁版の「戦史」によると上陸軍が内海のほうからやって来るということに気がついたのは上陸の前日のことで、陣地の移動やら何やらでだいぶ混乱したらしいです。

二十一日に北方のサンゴ礁のある内海のほうから上陸した上陸軍は二十四日までにはだいたい日本軍を島の東端にまで追いつめたようです。そして、二十五日には「全員玉砕」という結果になったのですが、アメリカ合衆国側も、それまでに千九人が死に、二千百一人が負傷していました。ハイランドさんとタラウさんは、私とその数字を口にする、こぞつて、アメリカ合衆国側の損害がそんなに少ないはずがあるものか、国家や軍隊というものの、自分に都合のわるいことにはウソをつくものだときめつけていました。

アメリカ合衆国側のその数字がウソかどうかはさておいて、日本側の大本営発表にはあきらかにウソがあります。さつき言った軍属の数字のあやまりのほかに（これはウソと言うよりは、軍部のえら

いさんたちが彼らを人間として考えていなかったということでしょう)、「連日奮戦」(これは事実です。まぎれもない真実です)のくだりのあと、「我に数倍する大損害を与えつつ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の寄与をなし」というところです。真実のところは「連日奮戦」したが「我に数倍する大損害を与え」ることはできなかった。そして、ベシオ島の飛行場の存在のおかげで「敵の有力なる機動部隊を誘引し」たことはたしかですが、「友軍の海空作戦に至大の寄与をなし」すことができたかどうか、友軍それ自体にすでにその力がなかったことはたしかな事実です。十一月二十九日、大本営は「マキン、タラワの玉砕」の事実にまつたくふれずに「第一次ギルバート諸島沖航空戦」の戦果(航空母艦二隻を撃沈したというのだから、たしかにカクカクたる大戦果です)を「軍艦マーチ」の鳴り物入りで発表して、そのあと、第二次、第三次、というぐあいに戦果の発表はつづいて航空母艦をあわせて八隻も沈めたことになるのですが、さて、真実のところはどうなのでしょう。「戦史」によると、アメリカ軍側の資料では、艦艇の被害は一隻もなかったことになっているそうです。「戦史」は「当時の報告による戦果が実施部隊の誤認によるものか、米側資料の虚偽の発表によるものか、今なお不明であり、今後の研究にまきたい」と言っているのですが、どちらにしても、国家や軍隊というものの、自分に都合のわるいことにはウソをつくものだという、巨大な二国の手まえ勝手な死闘(二回とも、何でほんとうに他人の土地に入り込んで殺し合いをする必要があったのですか)を「フリー・トゥ・ウオッチ」することができた二人のギルバート人の意見を大切にしたいものです。

四

島は、今、平和そのものです。海はあくまで蒼く、太陽はあくまで燃えています。ベシオ島は港の便がよくてそれで日本海軍もそこに眼をつけて飛行場をつくったのですが、今は港のおかげで「産業の中心」になっています。この「産業の中心」というのは島で今では手びろく貿易商をやっているフンさんのことなのですが、巨大な工場とか石油タンクとか、そういうことはで想像されるようなおどろおどろしいものがこの平和な島にあるわけはありません。すくなくとも、今はまだありませんと言っておいたほうが正確でしょうが、協同組合の店があつたり（店と言つても、アメリカ合州国の軍隊が残して行つたカマボコ兵舎です。それをそのまま使っています）、郵便局も「首都」（と言つても、「首村」と言つたほうがよいようなものでカッコつきで書いておきます）のあるタラワ本島よりかえつて大きなのがあつたりして、やはり、それなりによそでは見られない活気がありました。人口は七千五百人で、映画館もカマボコ兵舎改造のがひとつ。

ふらふら歩いていたらまず突然ポスターの日本文字が眼に入つて、それからそこが映画館だと気がついたのですが、映画は「これが沖繩のセックスゾーンだ」うんぬんの宣伝文句つきの「恐怖の肉地獄」という映画でした。千葉真一さんが主演していて、ポスターには半裸の女性が顔とからだを大きく出していました。ついでながら言うと、英語の題名は「マリファナ・シンディケイト」です。「成人用映画」のしるしの「X」がポスターにはついていました。その下にギルバート語の宣伝文句があつて、「これは興味ある映画だ」という主旨のものだと、学校教師のナタノさんが教えてくれました。映画館の

主人の肥った中年女性が出て来たのでアイサツして写真をとったら、別れぎわに「サヨナラ」と一言いきました。このあたり、日本軍の遺物は人びとのなかにまだまだ残っていて、「サヨナラ」「ア리가トウ」に出くわすのはむしろ日常茶飯事ですが、私の知らない軍歌を歌ってみせる人もいておどろかされます。その人はナウル島で、やはり、日本軍の飛行場建設に使われた初老のギルバート人でしたが、歌がすんだあと、「シゴト、カカレ、ヤスメ」と突然叫び出したのでびっくりしました。もうひとつ私をおどろかせたのは、道ばたで子供が何か見慣れたことをやっているので立ち止まっただけでございまして、「ジャンケンボン」でした。そんなふうには発音してやっています。

そういうことばのように眼に見えないものばかりでなく眼にあからさまに見えて来るいくさのあと、ベシオ島にはいくらでも残っています。巨大な「シンガポール砲」の残ガイのことはさつきも書いた通りですが、ほんとうにそのあたり、日本軍、アメリカ合州国軍双方の残して行ったものがちらばっていて、同行した写真家の友人の三留理男さんが、まるでノルマンディー上陸作戦の映画みたいだと言っていました。たしかに人が映画で見ると、ここでは実際に見るわけです。なかでも最も印象的だったのは、巨大な「シンガポール砲」のあるあたりから少し外れますが、サンゴ礁の浅瀬にこれはアメリカ合州国軍のもですが、水陸両用戦車やら自動車やらの残ガイがかたまっているところがあつて、自動車のタイヤがそのまま残っていたことでした。鉄の残ガイとちがつてやわらかくて、それでより生命に近い感じがするのでしょうか、ふしぎな感じをもちました。

日本軍のトーチカのあとも随所がありました。いちばん大きなのが司令部のあつたところで、巨大な四角の鉄筋コンクリートづくりのがヤシ林のなかにそのまま立っています。壁には無数に弾痕があ

るし、あちこち艦砲射撃の大口徑の砲の砲弾があたって穴があいていました。フンさんは英語はたいへんうまい人ですが、さすがそこは外国人で「バンカー」というべきところを「バンガロー」とまちがって言っていたので、はじめ、「そこに日本人のバンガローがある」と言われたときには、それこそ目さきのきく商社員が別荘でもたてたのかなと一瞬錯覚にかられました。もつとも、天井にポツカリと穴の開いたトーチカのひとつは、今はバドミンントンの試合場に使われています。もうひとつ、奇妙な使われ方をしているのを見たのは、島のえらいさんたちが集まるクラブです。二階建てのそのクラブ・ハウスの土台はトーチカだといのですがトーチカはケン固なのでクラブ・ハウスはなかなかガン丈にできているということでした。そこで、みんなでビールをのみました。オーストラリア製のビールです。「マサムネはありません」とタラウさんが、突然、言いました。

奇妙な使われ方と言えば、日本軍とアメリカ合州国軍の手ま、え勝手な死闘のもととなった飛行場ですが、そこには今ではもう住宅もたてば、ヤシの木も茂っています。ただ、地面が固くてヤシの木の高さも小さいのです。それと判るのですが、中心部のあたり、そこは地面がもつとも固いので、そのままフットボールの練習場になっていました。私たちがそこへ行ったときは夕方、フットボールの練習をしている人は誰もいませんでしたが、さかんにモーターバイクを乗りまわしている若者はいました。ツワモノドモガユメノアトというような感傷はおこりません。もつと乾いて、その地面のようにかたいものがそこにはありました。

そのモーターバイクは、もちろん、日本製です。車もたいていそう、フンさんが私たちを乗せて島をまわってくれた自動車も「トヨタ」でしたが、「結局、また、日本はやって来たじゃないか」と

フンさんは笑っていました。さつき述べた司令部のあった巨大なトーチカのそばです。こういう現象は南太平洋のどこへ行ってもそうで、たとえば、あとで述べるガダルカナル島でも、車はまずまちがいなく日本製なら、その車の交通違反をとりしまる警官の「白バイ」も「ホンダ」でした。

五

偶然行きあつたというほかはないのですが、タラワ本島にある「首都」（あるいは、「首村」）のバ
イリキでは、たいへんなことが行なわれていました。来年の独立をひかえて、「憲法制定会議」が行
なわれていたのです。つまり、「国家の誕生」です。そのひとつの現場に行きあつたというわけです。「憲
法制定会議」と言っても、いかめしいビルディングのなかで行なわれていたわけではありません。第
一、この「首村」にはビルディングなどひとつもなくて、議会の議事堂もパンダナスの葉っぱでふい
たものなら、「筆頭大臣」が執務する内閣の役所もカマボコ兵舎に毛の生えたものです。私が気に入っ
たのは、また、感動したのは、まず、彼らの「憲法制定会議」の会場です。ギルバート諸島では、ど
こへ行っても、部落ごとぐらいにヤシの木で骨組みをつくってパンダナスの葉っぱで屋根をふくとい
う、壁はなくて中部太平洋の風がいたってこちよく吹き抜けて行く「マネアバ」と呼ぶ集会場があ
るのですが、バイリキのそういうところで地べたにパンダナスの葉っぱのゴザを敷いて会議をやつて
いました。横手はフットボールの試合場です。会議がすむ夕方のころにはどこからともなく若者があ
らわれて、フットボールの練習にとりかかっていました。

中部太平洋のあちこちに散らばった島じまから住民代表がやって来て（はるか彼方のクリスマス島

からもやって来ていました。ハワイよりさらに東南に位置している島ですから、たいへんな遠さです。そして、交通の不便なことは類を絶しています。定期航空路はまだどこへもそこからは通じていないようです。タラワ島から行くなら、いったんグアムまで戻ってそこからハワイへ行き、いつ出るか判らぬチャーター便で飛びます)、総勢で三百人余がこの四月二十一日から五月九日まで、未来のギルバート国の憲法がいかにあるべきかを討議しました。百年近くまえの日本を見ているようなものですが、気がいいのは、この憲法制定という大事業が決して明治憲法のようにひとにぎりのおえら方の密室のなかの作業ではなかったということです。いや、この点では、私たちの現行の憲法だって同じでしょう。私たち日本人びとの知らないところで勝手に施行されてしまった。そういう涼しいところにハダシで坐ってみんなで国の基本をさだめているギルバートの人びとにくらべていかに私たちがおくれた人間であるかと、私は「マネアバ」での討議の現場をはしつこに坐って見ながらつくづくと思ったことです。今、はしつこに坐って見ながらと書きましたが、べつにそうするのに政府の許可も何もいらぬのです。勝手にやって来て、はしつこに坐ればよろしい。住民はそんなふうに見えているように見えました。テープレコーダーで会議の模様をテープにとったのですが、あとできいてみると、演説の声にまじってニワトリの音がきこえて来ます。そう言えば、犬も横手で見物していましたが、こういうテープは、いかめしいかたちで『明治の群像』なんかを見せてくれるNHKのテレビあたりで使えないものかと思いました。

各島の代表の人びとのえらび方も民主主義を絵に描いたような話でした。各島から五人来ているのですが、チョビヒゲ「筆頭大臣」に訊いてみると、えらび方は役人がひとり、協同組合からひとり、

議員さんがひとり、あとの二人は婦人代表と老人代表です。その二人は島の「マネアバ」での寄り合いで勝手に決めて来たそうです。そういう住民代表のほかに、会議には教会関係の代表、労働組合代表、政府のえらいさんも何人か参加していて、司会は議会の議員がやっていました。「筆頭大臣」も参加者のひとりですが、「筆頭大臣」として参加したのではない、出身地の代表として来たのだと言っていました。

その涼しい風が吹き抜けの、犬も来れば、ニワトリの声もきこえて来るという会議場で（そういう会議場で会議を開くのはしきたりみたいになつているらしくて、それだけ部落や村の集会場では寄り合いがそんなかたちで行なわれているということですが、バイリキから少し離れた村では、ギルバート諸島全体の婦人会議が開かれていました。ニューカレドニアからの客人もまじえての会議でしたが、彼らの場合、そのままそこで寝泊まりしているようでした）、国名をどうするか（「ギルバート」ということになつたようです）、国連に入るか（「入らない」ときめたようです。理由は、「お金が払えない」と「筆頭大臣」は笑いながら言っていました。ただし、「WHO」のような国連の下部機関には入るといふことです。分担金はシンドイで国連そのものには入らないが、下部機関のサービスを受けようというわけで少しばかり虫のよいユカイなもくろみです。ギルバート諸島よりはるかに金持国のナウル共和国もすでにそのタダ食い道の先達です）、あるいは、「ブリティッシュ・コンモンウェルス」にとどまるかどうか（「とどまる」という決定です。ただし、女王様を国家元首にいただくというどまり方ではない。インドと同じように「コンモンウェルス」の長としては女王を認めるというやり方で、この点で、いまだに女王様が国家元首であるという時代おくれのオーストラリアやニュー

ジールランドより先進的であるとともに自主独立の精神にとんでいます)、そしてまた、議会の構成をどうするか(「一院制」にきまりました。議員の人数は三十数人だったか五十数人だったか、「筆頭大臣」が三十数人とやったのをおつきの官房長官格のニュージールランド人が五十数人と訂正したのか、それともその逆だったのか、どちらにしてもおおらかなものです)——そういうもろもろが決められたのですが、それですぐ憲法制定というぐあいには行かない。イギリスと相談する必要もあるのですが、もっと大事なことは、代表たちが憲法のどこころを決めたあと、自分の出身地にもち帰って、村の集会場——同じようにパンダナスぶぎの「マネアバ」で住民の討議にかける。それで異議がないと決まるということです。

つづきは製品版でお読みください。